

## 古鏡より觀た日本の上古

梅原末治

【要約】日本上古の遺跡より発見される中国の古鏡は、前漢時代では主として北九州に限られているが、西暦紀元前後の鏡からはその數量が多くなると共に、同地域のみならず、中国・四国の瀬戸内側より畿内地方に広く分布して後漢三国代のものになると、畿内での出土品が夥しい數量に上るのである。この類は更に東の方中部日本より関東地方からも見出される。それ等と共に畿内地方で優れた仿製鏡が鑄造されて、これ等の殆んどすべては特色ある古式古墳に副葬されているのである。

従来見出された千面を超える夥しい各時代の鏡に就いて見ると、漢中期より後漢を通じての出土鏡は、総じて船載以後愛重伝世したことをそれ自体の著しい図紋の手なれで認められるものである。またこの種の鏡式の畿内出土の仿製品にも優れたもののあるのが認められる。次に後漢末から三国代の畿内地方に夥しい鏡——例えば画像鏡、三角縁神獸鏡などには同范所鑄の鏡が少くなく、その類の一括して同時に彼土から同地に齎されたのを示唆する。これは中国の正史に伝える記事と表裏するところである。而して是等の鏡が大和朝廷の特色あるまた既に一定の型をとつた高塚に副葬されていて、その副葬の工合たるや一墳に数多い点で、他の國土での単な、のる姿見としての副葬の様相とは違っている。

そうすると鏡から推されるこのような古墳の営まれた、三四世紀の時代には、畿内に於いて大和朝の形成が既に出来上つて、發展への段階に達していたことになる。同時にそれに至る過程は当初鏡が大陸から伝えられた北九州より、漢中期以降の鏡の多くが畿内に齎されて伝存する間にあつたと見るべきで、また各鏡式の通じての分布の示すところこれに重要な示唆を与えるものがあるのである。

—

古鏡は日本上代の遺跡より見出される遺物の中で、最も

顯著且つ重要なものの一つである。いまこの古鏡に就いて既往の調査考究の結果を綜括して、それから推される時代の状態を述べることとする。

映像の具としての鏡は、近代のものは硝子で造られているが、古代社会では洋の東西ともに銅を主成分とする金属で製造されたものであつた。東亜の中国では古い殷周の時代に既に一部にこの銅鏡と認められるものが存し、戦国時代になると、鏡背に鈕を具える白銅質の進んだ形の鏡が一般に行なわれた。漢の世では国家が大きく統一され、文化

生活が向上するにつれて、鏡も宮室の御用の為の尚方の官工での作鏡をはじめ、各地で盛んに製造され、其の使用が普及して、鏡背を飾る図紋の意匠の上によく時代の尚好を反映することになり、当代中国での目立つて特色のある工芸的所産の一となつた。従つて中国本土では既に唐宋の時代より殷周の古銅器——彼の国では尊彝と呼ばれ、礼楽乃至宝器として尊重したものと並んで、古代の著しい文化遺物として重んぜられ、学問的な研究もはじまつた。宋の中期には『博古図録』の公刊を見たのである。そしてこの鏡では漢鏡の精整と唐鏡の華麗な背紋が指摘されたのであつた。清朝になつては金石学の発達につれて、背紋の一部にある銘辭に就いてまでの精緻な考証がなされたことである。併し中国古鏡に関する考古学上よりする科学的な調査研究

になると、それはようやく前世紀の後半にはじまつたとも言ふべきであり、今世紀の十年代より三十年代に亙る時期に、主として日本の学徒に依つて展開されたところの実は新しい分野であるのである。

右の新しい研究は、日本上古の遺跡から出土する鏡の考察と結びつき、また当時中国本土で戦国時代の遺品が発見された新事実と相俟つて、既往の所見が前漢以前に遡り得なかつたのに対し、それに先立つ戦国時代よりの発達の迹が即物的に確められると共に、鑄造の技術なり、化学的成分の分析までも行なわれた結果、よく確実な成果を挙げたのである。かくて戦国時代の後半に於いて早く鏡が純銅約七〇%、錫三〇%を主成分とする、現代の *mirror metal* と呼ばれるものとはほぼ同じ質料を以てする優れた段階に達したことが分明し、また同時代の所謂山形字紋鏡の背紋意匠の構図より、当時円を三等分乃至五等分する幾何学的な知識のあつたことをも認められた程である。

日本上古の遺跡からの出土鏡は、もともと右の中国の銅鏡が同大陸からの金属文化の波及に伴うて伝えられたものであること、東亜での同じ四隣の他の国土、例えば滿蒙・

朝鮮・印度支那・西域などの場合と固より変りはない。併し他とは違つて、遺例が多く、その間に特殊な様相を呈する面があつて、よく此の国土での上古の最も著しい文物の一たることを示すのである。

## 二

さて従来此の島国から見出された古鏡は、明治維新後の出土に係るもののみでも干面に近い夥しい数に上るのである。中で現在最も古いのは中国で鏡が盛んに作られ出した戦国時代の後半の鏡式の一たる雷紋鏡・三圈紋鏡なり、それに先立つ別な鏡式と考えられる多鈕細紋鏡である。これ等の鏡の出土は先ず以て既に早く西紀前三・四世紀に大陸の金属文化のこの国に波及した事を示す重要な物的な拠所をなすものである。

前漢時代の中国鏡のこの国での出土品となると、四乳葉紋鏡・星雲鏡・精白鏡などその時代のタイプイカルな舶載品が北九州地方で数多く見出されており、西暦紀元前後の製作に係る尚方作方格規矩四神鏡なり、長宜子孫内行花紋鏡などになると、また発見数が多くなつて、後漢から三国

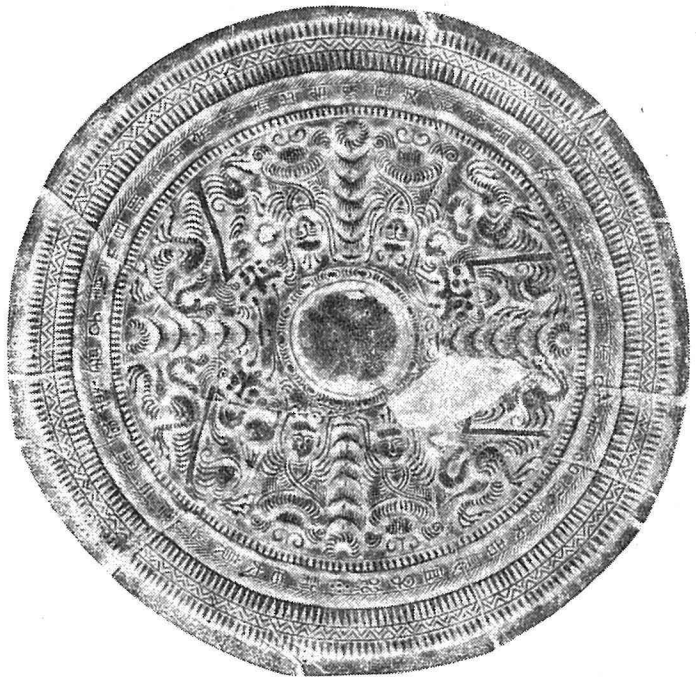
時代の中国鏡と共に、出土の地域は北九州よりも畿内地方を中心にして、東は一部関東地方にまで及び、殆んど旧日本の全土に互つている。そしてその間から他の国土の場合では稀な所謂仿製鏡、即ち舶載された鏡式を襲いながら此の国内で鑄造された鏡も同時に見出されて、その類の近畿地方で鑄造の行なわれたことが知られ、而も漢中期の鏡式にもとづく仿製品に著しいものがあるのである。

是等の日本出土の各種の古い鏡は、殆んどすべて古い墓の副葬品として、もと棺槨内に蔵置されたものであることは、中国本土なり、北部朝鮮、安南などの場合と違わない。併し此の国では北九州の甕棺墓に於ける前漢鏡を主としたもの——中で福岡県三雲、同須玖の両遺跡の例が著しい——をはじめ、其の後の時代の近畿地方に於ける壮大な高塚にあつては、すべて玉類——中で形の上では勾玉に特色がある——と鉄の刀・劍・矛等の武器と一所に数多く随葬されているのは、他の国土とは違ふ。此の点鏡えの当代人の愛重を自から示唆するのである。

## 三

是等の古鏡の中で舶載された古い前漢時代及びその以前に属する諸鏡の出土地の分布は、やや異色のある多鈕細紋鏡を除くと、殆んどが九州北部、殊に福岡県下の筑前に限られているが、西暦紀元前後の主要な鏡式で、漢宮室の官工の鑄造に係る方格規矩四神鏡なり、内行花紋鏡の類より、後漢時代になつての鏡鑑類、即ち盤龍鏡・夔風鏡・平縁式神獸鏡・画像鏡等にあつては、北九州よりも中国・四国の瀬戸内海側の地方を通じ、近畿地方一帯の範圍に、而も北九州よりも近畿地方での出土例が遙かに多い。

西紀三世紀即ち後漢末から三国時代の中国鏡——その主な鏡式が一般に、三角縁神獸鏡と汎称されている——になると、畿内地方が出土の中心地区であつて、他の地方では、北九州よりも寧ろ吉備・讃岐等瀬戸内側、東海、関東地方での発見例も目立つ。前世紀の後半から土地の開発に伴うて見出された此の類に、近年の各地に於ける遺跡の発掘で出土した確實な遺品を加えると、その数は実に三百面を超えるので



第一圖 但馬森尾出土魏三角縁四神四獸鏡拓影

あり、而も、その過半は畿内の出土に係るのである。そして以後の中国六朝前半の鏡にあつても、出土品の分布の状況はほぼ同様であるのである。

さて是等の各地での出土数の最も多い三角縁神獸鏡類なり、時代の上でそれに先立つ後漢後半の画像鏡・獸帯鏡・神獸鏡等のうちに、もと同じ鍔鏡で同時に作られたことの認められる遺品が少くない。この同範品に就いての所見は、個々の遺品の比較、殊にそれぞれの背紋を拓本に作つて細部までの合致を確かめることから認め得たものである。例を挙げるならば、徐州の銅を用いて当時の都たる洛陽で铸造されたことを銘文に明記する、魏の三角縁四神四獸鏡が、河内・大和・山城・但馬・美濃・近江等から十二三面も出土していて、その山城・但馬・大和・近江出土の四面（第一図はその一例）が同範品である。是等の同範鏡の出土数は、尚方作神人画像鏡其他でも数面に上るものがある。従つて右の事実からは等の同範諸鏡は中国で同時に造られたものが一括して日本に舶載されて、出土地域の人達に分蔵、やがてそれぞれの奥城に副葬されるに至つた事が示唆されて、舶載についての具体的な面を推さしめるのである。恰も中国の正史たる『後漢書』『三国志』の魏志に記載された歴史事実として、当時朝貢した倭の使者に多数の鏡を贈つたことが見えている。するとこれ等の同範品はまさに当時贈

与を受けて一括持ち帰つた鏡に相当するのが自から推されることである。

日本上古の状態を記した文献として著名な『魏志』の倭人伝には、明帝の景初三年（西紀二三九年）に倭の使が魏に至り、翌年彼の国の遣使と共に国に帰つた詳しい記載があ



第二図 和泉福泉黄金塚出土魏景初三年鏡拓影

るが、当時贈られたとある多数の鏡に比定されて然る可き景初三年と翌正始元年に鑄造された年紀の明らかな陳是作鏡が、大阪府下の福泉町の黄金塚（第二図）、兵庫県但馬の森尾古墳、群馬県群馬郡大類村芝崎の古墳（第三図）からそれぞれ見出されていて、正始元年銘の後の二者は実に同範



第三図 上野大類村出土魏正始元年鏡拓影

の所鑄によるものである。  
 是等の同範鏡に認められる事象、即ち当時彼土に交通して一括舶載されたと見られる魏代の鏡類が、畿内地方の古墳に主として副葬され、而もその出土の遺跡が宏荘な高塚であるのは、我が上古の具体的な記載たる『魏志』に見え



第四図 摂津紫金山古墳出土勾玉紋帯変形神獸大鏡

る耶馬台國の位置の問題、即ち古くより史家の間に畿内であるとする説と北九州と見る二つの異なつた所論が対立して、いまに上古史上の大きな問題として甲論乙駁がつづけられてゐる問題に対し、それが畿内であることの最も重要な証佐となる筈である。

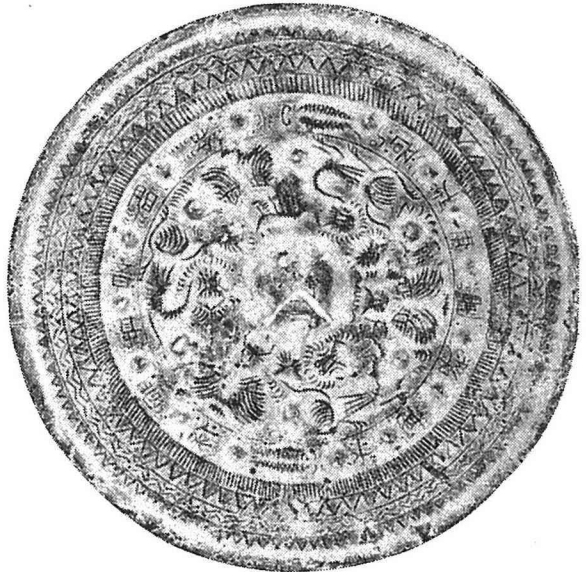
なお西紀三世紀代に於ける北方魏の國よりの夥しい鏡の舶載されたのに較べると、当時江南の地に拠つた呉國での鑄鏡はあまり多くないが、また出土してゐる。例えば呉の赤烏年間(二三八―二五一年)の鑄造に係る年紀のある神獸鏡が兵庫県宝塚市の安倉古墳なり、山梨県でも出土例を見るのであり、他にも同式の鏡が出ていて、失なわれた當時に於ける物の側から交渉關係のあつたのが推されることである。

#### 四

次に中国よりの舶載鏡に対して、此の國土で造られた所謂仿製鏡となると、中国の前漢鏡の一つの式に倣うた、そして、もと南朝鮮の一部で造り出されたと同じ小形のものも、三世紀の頃に北九州で鑄造されて、其等に既

に仿製品としての性格を示すものがある。近畿地方では、漢中期の鏡式に基きながら日本的特色を具えた類、即ち変形方格四神鏡、内行花紋鏡なり、漢末三国前後の彼の鏡式を襲うた画像鏡・三神三獸々帯鏡・龍鏡などが盛んに鑄造されたことが出土例から知られる。この類には往年奈良泉の日葉酢媛皇后陵より見出された鏡をはじめ、同柳本大塚、京都府与謝郡所在の一古墳、山口県柳井市外茶臼山、大阪府茨木市紫金山古墳出土品(第四圖)の如き、孰れも径三十糎を超える中国では普通でない大きさの、而も鑄造の優れたものが少くない。更に珍しい直弧紋鏡・當時の家屋を背紋にした家屋紋鏡などと言う独自の意匠の鏡なども明治の初年に奈良泉下で見出されていて、我が上古でのその分野の鑄造の術が本土たる中国に雁行するまでに達したことを示すのである。

此の所謂仿製鏡のうちにも、例えば最も数多い三角縁三神三獸々帯鏡には、同形の所鑄品が少なからず存する。その一例として、吾作明鏡ではじまる仿製品として稀な銘文のある遺品の如きは、大阪府柏原市国分の一古墳で二面、福岡県糸島郡一貴山古墳の一面(第五圖)、佐賀県谷口古墳



第五図 福岡県一貴山古墳出土三神三獸々帯鏡拓帯影

出土の二面が明らかに同范品であり、国分の一面が中での初鑄、また谷口の一面が後鑄と認められる。

時代が下るにつれて仿製鏡では縁辺に小鈴を加飾した鈴鏡——その鈴の数は概ね五、六個であるが、少ないのは時に四個、また多いのは十個を数えるものもある——なる他の国土に類を見ない鏡式が考案され、それが畿内よりも寧ろ

旧日本全土の各地で鑄造され、関東地方に目立つものがあるのが出土品から推される。これは我が上代人の鈴愛用の一面の鏡との結びつきを示すものに他ならない。

## 五

さて周知のように是等の古鏡類の主として見出される日本の古墳墓は、古式古墳と呼ばれる堅穴式系統の墓室の構造に特色のある高塚であつて、現在では中でのその前期から中期に互る時期のものとせられている。而して右の時期の先後観は、もと副葬品中に於ける中国鏡の年代から導かれて出したのである。然るに是等の高塚に副葬された既知の多くの鏡の実際からでは、代表的とも見える畿内地方での規模の大きい前方後円墳・前方後方墳・方墳などの場合、副葬鏡は既に指摘した如く、うちに早く将来されて愛重伝世したことを器の手なれで示している——この様な鏡は他の国土の副葬鏡には殆んど見られない——時代の遡る漢中期の諸鏡と、後に新たに舶載された漢末・魏代の鏡などが、此の国で鑄造された上記の、漢中期以降の鏡式の立派な仿製品と一所に存在するのである。それ等は北九州の須玖、



三雲等の甕棺墓の場合と同じく、一墳に副葬された鏡数の三十面を超えるものがあり、少くも数面であるのが普通である。明治十年代に偶然に見出された奈良県佐味田の宝塚、同新山の両古墳をはじめ、昭和の十年代に掘鑿された岡山県香登の丸山古墳、また戦後鉄道の修理工事に当り偶然見出された京都府椿井の大塚山古墳なり、奈良県柳本のいざなぎ神社裏の古墳などが、その著例であつて、いずれも多数の優秀な古鏡が玉・刀剣等の武具、釧・車輪石・鍬形品などの石製品と並んで主要な随葬の器物をなしており、それが特色ある塚の構造と相応じた副葬品の通性と見られるのである。如上の状況は他の国士での鏡が単なる常用の化粧具の一として、墓に副葬されているとは違つた著しい点である。これは古く神話にかたられていた鏡、また古史に伝えられている上代の鏡の性質とよく吻合するものであり、また古くより大和朝廷の皇位の象徴とせられて来た三種の神器が右の副葬品の鏡を首とする三者であることも自から聯関することを示すのである。

ところで是等の古式古墳は、その外形なり、内部構造の上で特色があるばかりでなく、既にそれ等が一つの通性を

具え、且つ規模も大きいのである。その点では実年代のほぼ確かな心神・仁徳両天皇陵——高塚としての頂点を示す殆んど空前な規模で、当代の主権者の陵たることの明らかなもの——と墓制そのものの上では殆んど異なるところがない。もと両天皇陵に先立つと言ふことで古式古墳と呼ばれ出した如上の諸古墳の營造の実時代に就いては、現在では心神・仁徳陵を中期として、個々の塚に見られる部分的な差異をとりあげて、かなり具体的な先後の考定がなされ、それが通説化された観がある。さりながら既に触れたように、右の所説の基くところの鏡が中国の铸造品であるので、よしやその時代が明らかになつても、それに依つて單純に遺跡の年代を推し得ないのはいふまでもない。そして日本の場合では殊に舶載後愛重永く伝世したもののあることを鏡自体の手なれが示しているのである。更に繰返すことになるが、其等が時代のおくれた、このような形迹のない中国の铸造鏡と一所に、副葬されているに於いて、遺跡の時代は固より後の時期を遡り得ない筈である。従つて如上の年代観に基いて戦後特に関心を高めている我が上古の状態をより具体的に知る拠所とする所論の如きは固より妥当性を

欠いたものと言うの他はない。

上に挙げた著しい古式古墳の個々の營造された時期に勿論先後のあることは言うまでもない。併し上来述べて来た副葬されている鏡の示すところより帰納すると、それ等はいずれも西紀三、四世紀の間のもものと認むべきである。而も当面の問題に対し、それぞれが有力者の奥城として、また応神・仁徳両天皇陵と同じ墓制なのであることよりすると、右の時期に大和朝廷が畿内に於いて既に成立し、隆盛の期にあつたことになる。

我が上古での著しい高塚の制は、現在の知見からすると、如上の既に定型化した畿内地方でのものが古い。引いて古式古墳と名づけられているのであるが、当然考えられる、それへの発達の段階のものとして、鏡の上からは北九州に於ける古い中国鏡を出す著しい甕棺墓を他に於て、同地で若干の箱式棺などが知られているに過ぎない。この点で直接に遺跡と結びつかないが、漢代中期からの舶載鏡が多数に畿内地方に伝わつて、愛重せられて、それ等が三、四世紀になつて同時期の舶載品と一所に宝器として副葬されている事実からすると、それは畿内地方に於いてその間に

行なわれ出して、右の特色のある墓制を示すことになつたとすべきであり、近時の考古学上の新知見からすると、我が古墳そのものが、もと大陸での堅穴系統の式を承けながら発展したものとすることを想定せしめる形迹の辿られる面が認められるのである。これは同時に大和朝廷の成立への過程をも示唆することでもある。

要するに漢中期即ち西暦紀元前後からの中国の古鏡が九州を経て畿内地方に段々と数多く伝えられ、それ等に明らかになつたことの認められるのは、高い中国文物の流入と享受・愛重の表われであり、それ等から優れた仿製品が同地方で造られ出して、やがて一括して有力者の奥城に蔵されたことは、此の時期に於いて同時に齎された中国の高い文化の刺激に依つて畿内の地区で統一した大和朝廷の成立したことを物の側から示すものであろう。而してこの時期に於ける古鏡の遺存が北九州より中国、四国の内海側から畿内に互つている事象は当代の畿内への中国文化の伝えられた主な径路をも示すものであるのがまた認められることである。

granting system, the traditional land policy of *Pei-Wei*, by observing the then political and social circumstances.

## The Nobles' System in Thuringia before the Investiture Conflict

by

Yoshiya Hayakawa

The symptom of formation of *Land* in Germany was at first seen in the northern Germany without any established power. Such tendency was especially predominant in Thuringia and the northern borderland which was included in the Saxon clan; before the Investiture Conflict churches of the borderland became executors of king's policy, were richly presented by kings, and also gained immunity and kings' ban, establishing the basis of the power by which they ruled their territories. Also, powerful vulgar nobles, based on their hereditary land, formed their independent territories, collecting official posts, Graf-right, and *Lehen*; some of them formed already a *crude* but *primary Landesherschaft*.

## Ancient Mirrors and Their Relationship to Early Japanese Culture

by

Sueji Umehara

Chinese bronze mirrors from the Early *Han* Dynasty have been found in large number in Northern *Kyūshū*. Mirrors dating to the period around the turn of the Christian Era have been recovered in even more extensive numbers and have come to light at sites in Northern *Kyūshū*, along the Inland Sea Coast of *Chūgoku* and *Shikoku*, and *Kinai* District. Recovery sites of the majority of mirrors dating from the Later *Han* Dynasty and the "Three Kingdoms" Period are centered in *Kinai* District, and extend further east to the *Tōkai* and even to the *Kantō*. Together with these imported mirrors, a number of *Bōsei-kyō* 仿製鏡, mirrors cast

in Japan in imitation of Chinese mirrors which were exported to this country, have come to light at sites. In *Kinai* District, many *Bôseikyô* were exquisitely cast and mostly found in *Koshiki-Kofun* 古式古墳 (Old-style burial tumuli).

More than 1000 ancient mirrors have come to light in Japan and those of Mid- and Later *Han* have been treasured and passed on to succeeding generations. This conclusion is based on the fact that the patterns of the mirrors seem to have been worn down as a result of continued handling. Many of the *Sankakuen-shiûju-kyô* and *Gazô-kyô* of the Later *Han* and the "Three Kingdoms" Period were frequently unearthed at the burial mounds in the *Kinai* District. Some of them were clearly made from a single mould. It may be conjectured with some confidence that mirrors produced from the same mould were brought to Japan either together or at the same time. This conclusion is substantiated by accounts in Chinese official histories. It is frequently reported that many mirrors have been found in a single burial container of tumulus. This fact, together with the manner of treating of those mirrors in the burial site, suggests that mirrors in Japan were never regarded as simple objects for daily use. The mirrors recovered from these tumuli show that the burial sites may be assigned dates no more specific than the third and fourth centuries. We may assume with confidence that the *Yamato* Court was already established and flourishing in the *Kinai* District when those burial tumuli were constructed. The geographical distribution of the recovery sites of the mirrors provides us with evidences of the gradual infiltration of Chinese culture into Japan in ancient times.

## A Process of the Making of Feudal Estate in the Early England

—folkland and bookland—

by

Reigan Tomizawa

Eric John, "Land Tenure in Early England" was published in